

次に示すのは、森浩美『夏を拾いに』(双葉社)の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「あのー、すみません」

玄関先の祖母に話しかける声に僕は驚いた。その声は高井の声に間違いなかった。

「小木くん、いますか？」

「フミかい？ いるけど……」

「あ、小木くんと同じクラスの高井と言います」

「あれま、しっかりした物言いだね。ちよつと待っててね、今、呼んであげるから」

僕は祖母に呼ばれる前に、自分から基地を抜け出して縁側に出た。

「小木くん」

「おう、高井」

僕はこつちにこいよと、手招きした。

祖母は僕に近づく、「見かけない子だね」と小声できいた。

「ああ、東京からの転校生だから」

「そうかい。道理でこの辺りの子とは感じが違うと思ったよ」と言うと、祖母は家の奥に行った。

「よくオレんち分かったな？」

「学級名簿で調べた。でも、ちよつと分かりづらかったけど、あとは勘で」

高井はそう言いながら、何気なく家を見回した。洒落た高井の家とは似ても似つかない古い家だ。恥ずかしい思いがした。

「ボロいうちだろ」

「いや、うちよりずっと広いし、庭だって大きい」

高井がとつさに気づかったのが分かった。

「お前、よく家を抜け出せたな？」

「母さんが買い物に出たすきに」

「大丈夫なのかよ？」

「やることはやってるし。ただ、あれから、あんまり口をきいてくれないけどね」

あの母親ならそういう態度もとるだろうな、と高井に同情した。

「でも、うるさくなくっていいよ」

たぶん強がりを言っているんだ。

「ふーん、そうか。で、何の用だ？」①少しぶつきらぼうにきく。

「不発弾探しはやってるの？」

「ああ、ちよつとは行つたけど、昨日と今日は行つてない。作戦を考えてるんだ」

さすがに全然行っていないとは答えづらく、嘘をついた。

「ふん、だと思った」

以前よりは打ち解けたとはいえ「お見通しだよ」といった鼻持ちならない感じがやつぱりする。きつと、僕の嘘も見抜かれているのかもしれない。そう思うと余計、しやくにさわる。

と、祖母が丸いお盆に切ったスイカを載せて運んできた。

裏の畑でスイカを作ったこともあるけど、トマトやなすとは違い、スイカのデキはよくない。中身が薄いピンク色で甘味がなかった。だから、丸ごとのスイカをスーパーで買って、裏の井戸の中に吊るして冷やす。

「あんまり冷えてないけど、それでも食べな」

祖母が茶の間から扇風機を持ってくると、首振りのポツチを押した。②生暖かい風が左右に行き来する。

僕はスイカを挟んで縁側に並んで座った。僕は裸足の足をぶらぶらさせた。

「スイカ、喰えよ」

「うん、じゃあ。いただきます」

僕はスイカに手を伸ばし、それを口に運んだ。祖母の言うように冷え冷えではなかったが、かなり甘くて美味しい。三日月に切ったスイカに歯形が付き、両方のほつぺたに汁が流れた。

「根岸くん連絡した？」

僕はかぶりついたスイカの種を口の中で選り分けると、ほつぺたをふくらませて庭の遠くへ種を吹き出した。

「してない。向こうからだってこないし」

高井はスイカの種を手のひらに出すと、それをお盆の隅に置いていねいに置いた。

「みんなで不発弾探し再開しよう。やぶの中だって探せばいい。ちゃんと蚊に喰われないように長袖のシャツとか着て、薬も用意して。それと、意地を張ってないで、根岸くんも誘ってさ」

「意地なんか張ってねーよ。それに悪いのは雄ちゃんだし。②なんで、オレが謝んなきゃいけねーんだよ」

「小木くんは謝れなんて言ってるだろ。でも、みんなでやった方が④コウリツもいいし、それに……」と、高井は言葉を切った。

「それに、なんだよ」

「それに……。みんなと一緒にの方が楽しいだろう？」

雄ちゃんに意地悪されていた高井が、一緒の方が楽しいなんて。僕は黙ったまま、また種を吹き出した。

「根岸くんは、確にお調子者で、すぐなまけるし、気分屋だと思うよ。それに、僕のことは嫌いだろうし……。でも、小木くんとはずっと友達なんだろう？」

「うん、まあ。幼稚園のときからな」

「だったら、余計だ」

「お前が気にすることじゃねーよ」

縁側の前には、種を目当てに⑤ムラガリ始めていた。

「うらやましいって思ってたんだよな」

「はあ？」

思わずスイカを口に運ぶ僕の手が止まった。

「教室でもどこでも、君ら、いつも三人で楽しそうじゃないか」

「お前は迷惑そうな顔してたじゃねーか」

「ああ、あれはポーズさ」

僕が⑥拍子抜けるほど、高井はあっさりと答えた。

「なんだ、それ？」

「僕は小さい頃から、習い事ばかりやらされてたから、放課後、誰かと遊ぶこともなかった。クラスメイトはいたけど、気づいたら仲のいい友達がいらない。こつちに転校してきても、実は一年で戻るって決まってるし。それに転校生だろ、仲間外れにされるのがいやだったんだな。どうせ、仲間外れにされるなら、自分から近づかないようにした方がカッコ良く見えるかなって思ったんだ。ほとんどの男子からは嫌われると思ってたけどさ。でも、君らがふざけてると楽しそうで、うらやましくてさ。なんかそんなの見ててムカツとすることもあったし、バカだなんて思うこともあったけどさ。ほら、池跳びだつて」

「バカで悪かったな」

「でも、一緒に磁石取りに行ったり、不発弾探ししたりするのって面白かった。③友達と遊ぶのって楽しいんだなって。ほら、小木くんがさ、お前も仲間だつて言ってくれただろう。うれしかったな。だから、続けたいんだよ、仲間で不発弾探し」

以前ならきつと、キザなヤローだとムカついたのであるけど、④高井は妙に素直にしゃべっている気がした。

「だから、根岸くんと仲直りしろよ。根岸くんが僕を嫌ったままでもいいからさ。明日は登校日だし、どっちみち学校で顔を合わさなきゃならないんだから」

「⑤ああ、考えておく」

僕はそう言うと、またスイカの種を遠くへ吹き出した。

高井が帰って昼ご飯を食べてから、しばらくゴロゴロしていたけど、どうにも⑥高井に言われたことが気にかかって、僕は起き上がった。

「ああ、もうっ、くっそー。ちょっと行ってみるか」

謝るんじゃない、ただ様子を見に行くだけだ。僕は自転車にまたがって雄ちゃんちへ向かった。気が進まない分、

こぐペダルは重く、照りつける太陽が憎らしく思えた。

雄ちゃんちが近づく、ゆつくりとペダルをこいだ。

もし会ったら最初になんて言えればいいんだ？

僕は言葉が見つからず、そのまま雄ちゃんちの前を通過した。そして角を三回曲がって、もう一度、雄ちゃんちの前に回り込んだ。でも、また通過した。

「※」 「そんなことを考えた。同じ道をぐるぐると四周しかけたときだった。雄ちゃんちの玄関扉が開いて誰かが出てきた。雄ちゃんのかあちゃんだ。僕はその姿に気づかないフリをして、スピードを落とすと視線をペダルの方へ下げた。」

「あら、ブンちゃん」

おばさんが僕に気づき名前を呼んだ。

僕はいかにも今やってきたように、おばさんの前で自転車を降りた。

「こんにちは」と、僕は頭を下げる。

「雄二かい？」

偶然、通りがかったただけだと言うつもりだったのに、つい、うんとうなずいてしまった。

「ごめんね、ブンちゃん」おばさんは、いきなりそう謝った。

「え？」

「ケンカしたんだって？ ㊦マツタク、あのばか。ホントにごめんね」

おばさんはパーマのかかったくしゃくしゃの髪に手を当てながら、僕に軽く頭を下げた。

「いや、ううん、その……」

予期せぬ㊦セイパンチをまったく別の人からもらってしまった気がした。

「ちよっと待ってね、今、雄二、呼ぶから」

おばさんは、玄関から階段を見上げながら「雄二、ブンちゃんがきてくれたよ。ほら、雄二、何やってるんだい、もうっ」と、大きな声で雄ちゃんを呼んだ。

でも、二階からの返事はなかった。

「あのグズ。ごめんね、今、とっつかまえて下ろしてくるから」と、おばさんは腕まくりをした。

すると「オレ、会わねーから」と雄ちゃんの声が聞こえた。

「何、ごちやごちや言ってるんだい、お前は」

おばさんは、玄関に立てかけてあったほうきをぐっとつかむと、勢いよくつかかけを脱いで上がりばたに片足をかけた。

「おばさん、いいよ」

僕はあわてて声をかけた。放っておけば、雄ちゃんはほうきの㊦柄で二、三発は殴られそうだ。

「すねちまって、男のくせにみつともない。ああいうのはガツンとやんない」と

「ホント、いいから」僕はおばさんの袖をつかんで、大きく首を振った。

「だって、ブンちゃん」

無理矢理、雄ちゃんを引っ張ってこられても、気まづさが増えるだけだ。

「またくるよ」

「えー、そうかい、悪いね。今晚、ポカんとやっとかから、ごめんね」おばさんは、こぶしを握って息を吹きかけた。

「ねえ、おばさん、雄ちゃん、何か言ってた？」

「え、ああ」

おばさんは、にやっと笑うと「転校生で高井くんっていう子がいるんだって？」と、きいてきた。

「う、ううん」

「雄二が言うには、ブンちゃんはその子の肩ばかり持つ」ってふくれてんだ。男のくせにヤキモチ焼いてんだね、あの子は」

ヤキモチって。そう言われるとなぜか気恥ずかしい。

「ほら、雄二はブンちゃんのこと好きだから」

大好きはどうか。でも、いつも一緒だったし、楽しかったことは間違いない。時々、㊦面倒くさい存在ではあるけど。

「他には？」

「え、他に。いいや別に何も言つてなかつたけど。何かあったの？」

逆にかかれて、僕は大きく頭を振つた。雄ちゃんは、僕が「うんこ屋」と言つたことは黙つていたんだと察した。「おばさんさ、雄二がブンちゃんみたいな子と友達になれてよかったって思つてんだよ。あれはブンちゃんと違つて頭が悪いからね。普通は相手にされないんじゃない？それに、ほら、うちの仕事がね。ずいぶん、学校とかでからかわれてるんだろうし、雄二にはいやな思いをさせてるんじゃないかってさ。なのに、ブンちゃんは仲良くしてくれて」

そう言われると、後ろめたい気持ちになる。

「親としてのオイメがあるもんだから、ねだらたら新しい自転車なんか買つてやつたりして。ブンちゃんなんか中学までちゃんと待つてゐるのに。甘やかし過ぎだね」

確かに物は買つてもらつてゐると思ふけど、おばさんのしかり方を知つてゐると甘やかしてゐるようには思えない。ただ僕だつて、もしねだつて買つてもらえるなら何でも買つてもらいたい。

「親なんて、みんな自分の子どもが心配でさ。ブンちゃんだつて同じでしょ」

「うちの親は違うけど……」

僕は小さく頭を振つてため息をついた。

「そんなことないよ。ブンちゃんのこと気にかけてるつて。子どものことを心配しない親なんていやしないよ。当たり前じゃないか。でも、いいよね、ブンちゃんは勉強ができるから。自慢の息子だ。鼻が高いだろうね。あ、こんなこと言うから、雄二がひがむんだね、ははは。でも、あれでいいところもあつてさ。勉強がだめだからつて別のことで目立つて、あたしを喜ばせようとしたりするし。ま、運動会の駆けっこくらいなもんだけどさ」

普段おちやらけた雄ちゃんが運動会の④トキョウソウだけは真剣に走るの、そういう⑤ワケもあるんだ。おばさんは雄ちゃんのこと可愛くて仕方ないのだろう。うらやましさと少しの嫉妬を感じた。

「あ、ごめんね。ついつい、つまらないことばかりしゃべつちやつて。でも、あんなばかだけど、ブンちゃん、見放さないでね。中学校は一緒だけど、あの頭じゃ、ブンちゃんと同じ高校は受からないだろうし、もし別々になつてもかまつてやつて。ずっと一生、つきあつてやつてね」

知らないとはいへ、息子にひどいことを言つた僕に、一生、友達でいてやつてくれと頭を下げるおばさんの姿に、心の底からすまない気持ちがわき上がってくる。

「おばさん、雄ちゃんのことぶたないでよ。オレも悪いんだ」

僕はそう言つて玄関の外に出ると、二階の窓に向かつて声をかけた。

「雄ちゃん、明日、登校日だな」

返事はなかつた。

「じゃあ、学校でな」

開け放された雄ちゃんの部屋の窓に、風になびくブルーのカーテンが見えた。

僕は自転車にまたがると、もう一度雄ちゃんの部屋を見上げた。窓の縁の所に手がかかるのが見えた。⑧するとゆつくり頭が出てきて目の高さで止まつた。隠れながら僕を見ているつもりなんだろうけど、バレバレだ。

「じゃあな」僕は後ろ向きに手を振つた。

問1 — ㉗㉘について、カタカナは漢字に直し、漢字には読み方を記しなさい。必要ならば送りがなも記すこと。

問2 — ①「少しぶつきらぼうにきく」について、このときの「僕」の気持ちを説明しなさい。

問3 — ②「なんで、オレが謝んなきゃいけないーんだよ」について、このときの「僕」の気持ちとして最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア できるものなら、うやむやにしておきたい
イ できるものなら、自分から謝ってしまいたい
ウ できるものなら、もう少し意地を張り続けたい
エ できるものなら、このまま高井も一緒に遊びたい
オ できるものなら、先に雄ちゃんに謝ってもらいたい

問4 — ④「高井は妙に素直にしゃべっている気がした」について、どうして「素直」と感じたのか、説明しなさい。

問5 — ⑤「ああ、考えておく」について、この返事からわかることを六十字以内で説明しなさい。

問6 — ⑥「高井に言われたこと」について、その説明としてあてはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雄ちゃんにもう連絡したかと言われたこと
イ 雄ちゃんと仲直りするようにと言われたこと
ウ 雄ちゃんに嫌われたままでいいと言われたこと
エ 雄ちゃんとの関係をうらやましいと言われたこと
オ 雄ちゃんに意地を張らなくてもいいと言われたこと

問7 — ⑦「※」にあてはまるものとして最も適切な一文を選び、記号で答えなさい。

ア 高井みたいなやつとはもう一緒に遊びたくなんかないな。
イ 誰かが出てきたらこのまますぐに逃げ出しちやおうかな。
ウ 向こうから僕を見つけてくれて声をかけてくれないかな。
エ もう雄ちゃんと仲直りするつもりなんてないんだけどな。
オ 雄ちゃんは今までずっと僕にヤキモチ焼いていたのかな。

問8 — ⑦「面倒くさい存在」について、その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア いつもちょっかいを出してきて、わずらわしさを感じる存在
イ 勝手なことばかりするけれど、何かにつけて頼りになる存在
ウ 自分では何もしないくせに、すぐ人のせいにするいやな存在
エ 時々ケンカもするけれど、気になってほうっておけない存在
オ 根はおとなしいけれど、怒ると何をしだすかわからない存在

問9 — ⑧「するとゆっくり頭が出てきて目の高さで止まった」について、このときの「雄ちゃん」の心情を説明しなさい。

問10 — ③「友達と遊ぶのって楽しいんだな」について、あなたがこのように思った最近の経験を、具体的に教えて下さい。

(2010年度)

国語 解答用紙 その一

受験番号

氏 名

[illegible]

氏 名